

『絆が人を生かすから

～ホームレス支援から見える無縁日本』

NPO法人北九州ホームレス支援機構

理事長 奥田 知志

1、はじめに

東日本大震災の状況の中で、早期に支援団体が現地で炊き出しなどの支援を行った。また、被災者の北九州市への受け入れを積極的に行い、60数世帯、200人近くが現在北九州市内で生活している。

2、2008年9月以降の変化

2008年9月以前はホームレスの平均年齢は58歳だったが、リーマンショックにより、多くの派遣社員が解雇され、20～30代の若年ホームレスが出現する。

⇒特徴

- ①深い絶望に陥り「死にたい」「帰る道がない」と絆無き状態。
- ②両親・兄弟がいるにも関わらず、関係が切れてしまっている。

⇒絆が切れているということ

- ①いざという時の助けがない
- ②自己の存在意義の見失い

自分がホームレスだと認めない

⇒困窮概念

戦後の日本社会における社会保障制度は、二つの困窮（ハウスレス・ホームレス問題）で区分している。

- ・第一の困窮—経済的困窮・・・ハローワーク、年金、生活保護
- ・第二の困窮—身体的困窮・・・健康保険制度、障害福祉、高齢福祉、介護
- ・第三の困窮—关系的困窮（孤立）

引き取り手の無い遺体（家・病院を含む）が一年間で3万2千人にも上り、もはやホームレスだけの問題ではない。

絆の制度化＝パーソナルサポーターが必要

関係の損失を促進させたもの⇒『自己責任論社会』

3、自己責任論社会とは何であったか？

新自由主義、小さな政府、競争社会、格差社会という思想が問題を放置させ、個人を孤立させる自己責任論社会を造った。虐待とは、「自己責任を果たすことのできる強い人間がまともな人間である」という観念から、子育てを自己責任論・身内責任論に留め、他者の介入を極端に排除した結果である。自己責任論は「社会」の否定であり、社会の無責任論である。

人類の結論・・・人は独りでは生きていけない。

生きていくには他人の力が必要であり、他人の力を仕組みに変えたものが社会である。他人だからこそできる「学校教育」という社会的システムは、世界中で採用されている支援の成功例である。ホームレス支援とはこのような「社会化の事業」として推し進めていくべきだ。

4、ホームレスの現状

1) 自立の実績

- ・04年北九州市内500人⇒11年3月103人
- ・自立者総数 1200名
- ・自立率 93%
- ・自立継続率 94%

2) 経済的社会的背景

- ・1985年 派遣法一寄せ場労働者の認識論的特権
- ・1995年 経団連「新時代の『日本的経営』－挑戦すべき方向とその具体策」
- ・1997年～1998年にかけての変化⇒構造改革、新自由主義
- ・1999年派遣法原則自由化

ホームレスの約4割が療育手帳取得者

若年ホームレスの約4割が中卒

【市内ホームレス数の変化】

1997年142人 1998年⇒236人へ

※もうひとつの数 1997年24,391人⇒1998年32,863人

失業率 5.0% 完全失業者 340万人

有効求人倍率 0.55

5、ホームレス支援の視点

①野宿者の抱える二つの貧困

⇒ハウスレス・・・物理的困窮（家、食、衣類、金、仕事、保険・・・）

⇒ホームレス・・・関係の困窮（家族、家庭、友人・・・関係）

②支援の視点

■彼には、何が必要か？

■彼には、誰が必要か？

ある男性を保護しアパートを提供したが、ある日、帰り際に部屋の中でポツンと座っている

男性の姿が、駅の通路でポツンと座っていたホームレス時代の姿と重なった。何が解決できて、何が解決できていないのかというのが問われた。路上で「最後は畳の上で死にたい。」という言葉をよく聞いた。しかし、アパート支援をした人が次に口にしたのは「自分の最後は誰が看取ってくれるのか」という言葉だった。

かつては家族や家庭・地域そういったものに象徴されてきた「ホーム」という関係性が切れている。ホームレス状態（無縁状態）を同時に支援しなければ、単なるハウスレス問題の支援ではいけない。支援をしていく上で、「何が必要か」「誰が必要か」という二つの問いに同時に答えることが重要である。

③新しい社会的セーフティーネット

⇒餓死事件から見たもの

餓死・・・公助の責任・・・生存保護（法）

孤独死・・・共助の役割・・・生活保護

※制度的セーフティーネットと人的セーフティーネットの両輪

⇒生活保護の今後

～受け皿福祉から伴走的福祉へ～

支援とは人と制度を繋ぎ、持続性のある伴走的コーディネーターが重要である。

④ホームレスからハウスレスへ

ホームレスは、単に心の問題ではない。

※多重債務の現状

「無縁と無知」が人を殺す

⑤総ホームレス化時代

1) 中学生がホームレスを襲った襲撃事件から

襲撃をした中学生は、「家があっても帰るところがない、親はいても心配してくれる人がいない」のではないか。ホームレスとしてその気持が分かる。問題は、「帰る所があるか・心配してくれる人がいるか」ということである。中学生・小学生のホームレスがいるのではないか。

2) どのようなホームが必要か

絆そのもの、ホームそのもの・・・ホームレスを生まない社会の形成
どんなホームかが第一の課題ではない・・・ホームそのもの、絆そのもの
信頼できずともつながる

地縁・血縁を乗り越える・・・誰でも家族になれる

⇒ホームレス支援の希望 そもそも血などつながっていない！？

絆が切れるとは？

1) いざという時に助けてくれる人がいない

2) 自らの存在意義を見失う

⑥自立支援を包摂する人生支援を！

二つの人間観の狭間で

- 1) 人はいつか変わる
- 2) 変わらなくても人は生きる

自立支援（人は変わる）・・・変わっていきける「良い」ホームレスという感覚
人生支援・・・生きることに意味がある

I さんのこと・・・ホームとは何か？

不良だった少女が、妊娠・出産を機に除々に変わっていった。

何が彼女を変えたのか⇒子どもとの出会い・絆

子どもが無言のうちに、「あなたがお母さんだ」と言い続けている。

『他者からの言葉が人を変える』

出会いがなくなると、自分が幸せかどうかも分からない。

⑦絆の制度化

絆は、過去への回帰か？

身内の責任論の地獄

従来 of 家族の弊害

新しい社会的家族の創造

社会的ホームの創造を！

⑧絆の意義—助けて！が言えない時代

派遣切りされた若者たちの抱える二つの貧困

「助けて」と言えない若者たち

⇒「こんな格好じゃ、帰れない」＝こんな格好で帰ったら、親は迷惑がるに違いない

自己責任論社会の結末

自己責任論—社会的無責任

幼少時代から「助けてと言えない、言わせない、聞きたくない」

誰かがホームとなる・・・つなぎ家族の存在⇒社会が保障する

ある自立者の証言・・・

退職後、ホームレスになって駅で倒れた時、医者・看護師・役所・ボランティアの人が親身になって話を聞いてくれた。「この世の中には助けてくれる人がいたんだ」「助けてと言えた時が助かった時」と感じた。

息子の登校拒否・転校を経験して・・・

他者から助けられたことのない人が、どうやって人を助けるのか。「助けて」と自分が言えないと、人から「助けて」と言ってもらえない。

『「助けて」と言えた日が助かった日だった』と全員が言える社会を目指す。

6、ホームレス化の時代・・・新自由主義社会を支える二つの分断テーマ「自己責任論」「安心安全」

①ホームレス襲撃を支える価値観

■ホームページへの書き込みから

「生産性のない人間が迫害を受けたり、差別されるのは当然のことだと思う。そこに下手に餌を与えたりするから生産性のチャンスがある人間でもクズに成り下がるのである。迫害されることによって自分が悪いと気づくのがまっとうであろう。それで自分が悪いと思わずに人権ばかりを叫び、人を幸せにする能力もないのに自分の幸せばかりを誇張する態度が問題なのである」。

⇒ホームレス襲撃の構図

- 1) ストレス発散
- 2) 安心感（大人の本音）
- 3) 生産性の証明

②安心安全のまちづくりが人を分断、孤立させる―「助けて」を聞かない社会

■福岡東区住民署名

「〇〇校区はこれまで安全、安心の街づくりに全力で取り組んできました。そんな中住宅地にタイプの違う人たちが、集団でやってきて一般住民として生活します。せっかく築き上げてきた明るく住みやすい街にひびがはいり、治安や秩序が乱れるおそれがあります。」

⇒安心も安全も普遍的概念でなければならない・・・誰の安心、安全か

⇒「私たちの安心安全」・・・出会い無き安心安全

⇒ほんとうの安心安全をもとめて・・・普遍性・・・他者性によって保持される

※灰谷健次郎・・・太陽の子・・・いい人とは

「いい人ほど、勝手な人間になれないから、つらくて苦しいのや。

人間が動物と違うところは、他人の痛みを自分の痛みのように感じてしまうところなんや。ひょっとすれば、いい人というのは、自分の他にどれだけ自分以外の人間が住んでいるかということで、決まるのやないやろか？」

いい人は危険を冒す。

社会的リスクマネジメントとは？

いかにしてリスクを減らすか・・・リスクマネジメント



いかにしてリスクを分担するか・・・社会的リスクマネジメント

富（所得）の再分配と痛みの再分配

きずな（絆）には、「きず（傷）」が含まれる

健全に傷つく―社会 タイガーマスク現象とは何であったか

抱樸ということ

③下関駅放火事件に思う・・・抱樸館の挑戦

⇒制度的（社会的）問題・・・触法累犯障害者

⇒なぜ放火を繰り返したのか

⇒人生で一番つらかった日・人生で一番良かった時

【まとめ】

路上を中心にホームレスの支援活動をしていく中で、経済的困窮のみならず、人や社会との関係的困窮が見えてきた。リーマンショックによる経済の悪化に伴い、20～30代の若年ホームレスの数が増加している。若年ホームレスの特徴は兄弟や両親がいるにも関わらず、絆が切れて孤立化しており、自己の存在意義を見失い、強い絶望感を持っている。家族や社会との絆の損失を促進させたのは「自己責任論社会」である。幼少期から植えつけられた「自己責任を果たせる人間が強い人間である」という観念が、他者の介入を排除し、「助けて」と言えない、言わせない孤立した環境を作った。しかし、アパートに入居したホームレスの多くは「自分の最後は誰が看取ってくれるのか」と口にし、人間とは人との絆を求め、独りでは生きていけないというのが長年の支援で得た結論である。

このような方々を支援していく上で、その対象者には「何が必要なのか」「誰が必要なのか」という視点で持続性を持って伴走していくことが重要である。良い人ほど、自分を卑下しながら生きているもので、その心を打ちあけてくれるのは他者の言葉である。現代の若者は自問自答の中で過少評価してしまっているのだ。この世の中には助けてくれる人は必ずいる。社会保障制度としての「絆の制度化」を進め、「助けてと言えた日が助かった日だった」と全員が言える社会を目指さなければならない。

【抱樸館（ほうぼくかん）由来】

みんな抱（いだ）かれていた。眠っているに過ぎなかった。泣いていただけだった。これといった特技もなく力もなかった。重みのままに身を委ね、ただ抱かれていた。それでよかった。人は、そうしてはしまったのだ。ここは再びはじまる場所。傷つき、疲れた人々が今一度抱かれる場所—抱樸館。人生の旅の終わり。人は同じところへ戻ってくる。抱かれる場所へ。人は、最期に誰かに抱かれて逝かねばなるまい。ここは終焉の地。人がはじめにもどる地—抱樸館。

「素を見し樸を抱き」—老子の言葉。「樸（ぼく）」は荒木（あらき）。すなわち原木の意。「抱樸」と

は、原木・荒木を抱きとめること。抱樸館は原木を抱き合う人々の家。山から伐り出された原木は不格好で、そのままではとても使えそうにない。だが荒木が捨て置かれず抱かれる時、希望の光は再び宿る。

抱かれた原木・樸は、やがて柱となり、梁となり、家具となり、人の住処となる。杖となり、楯となり、道具となって誰かの助けとなる。芸術品になり、楽器となって人をなごませる。原木・樸はそんな可能性を備えている。まだ見ぬ事実を見る者は、今日、樸を抱き続ける。抱かれた樸が明日の自分を夢見る。

しかし樸は、荒木である故に少々持ちにくく扱い辛くもある。時にはささくれ立ち、棘とげしい。そんな樸を抱く者たちは、棘に傷つき血を流す。だが傷を負っても抱いてくれる人が私たちには必要なのだ。樸のために誰かが血を流す時、樸はいやされる。その時、樸は新しい可能性を体現する者となる。私のために傷つき血を流してくれるあなたは、私のホームだ。

樸を抱く—「抱樸」こそが、今日の世界が失いつつある「ホーム」を創ることとなる。ホームを失ったあらゆる人々に今呼びかける。「ここにホームがある。ここに抱樸館がある」。

2007 年4 月7 日NPO法人北九州ホームレス支援機構 理事長 奥田知志

奥田知志氏 プロフィール

◆経歴と役職

1963年7月15日生まれ。滋賀県大津市 47歳

1982年～1988年	関西学院大学神学部 学部および大学院修士課程卒業
1982年～1988年	大阪釜ヶ崎にて支援活動に参加
1988年～1990年	西南学院大学神学部専攻科 同卒業
1990年	東八幡キリスト教会牧師就任
1990年	ホームレス支援組織 北九州越冬実行委員会に参加 事務局長就任 1995年より代表となる
1998年～2003年	九州大学大学院国際比較文化研究所博士課程後期 単位取得退学
2000年	NPO 法人北九州ホームレス支援機構設立 理事長就任
2003年11月	財団法人 ソロプチミスト日本財団より 社会ボランティア賞 社会人の部 団体受賞
2004年9月	第34回毎日社会福祉顕彰受賞
2007年6月	ホームレス支援全国ネットワーク 代表就任

(現在の役職)

日本バプテスト連盟東八幡キリスト教会牧師

NPO(特定非営利活動)法人北九州ホームレス支援機構 理事長

NPO(特定非営利活動)法人ホームレス支援全国ネットワーク 理事長

九州ホームレス支援団体連合会代表

福岡県ホームレス自立支援推進協議会副会長

北九州市ホームレス自立支援推進協議会委員

「北九州市におけるホームレス問題解決のための市民協議会」 事務局長

社会福祉法人グリーンコープ 副理事長

北九州大学大学院 特任教授

学校法人西南学院 理事

◆著書その他

- ①1994年共著 「わかれ道に立ってよく見」 ヨルダン社
- ②2004年共訳 「ボンヘッファー説教全集 第2巻」 新教出版社
- ③2004年共著 「希望の再発見」 九州バプテスト神学校
- ④2005年著 「恵みのいましめ」 日本バプテスト連盟宣教研究所
- ④2006年共著 「ホームの回復」 明石書店
⇒第5回日本NPO学会賞受賞作品
- ⑤2007年 「ホームの創造—ホームレス支援の現場から」
福岡県人権研修所発行 リベラシオン NO127 掲載
- ⑥2007年 「すべてのホームレスにトータルなサポートを
—基本方針見直しに求めるもの」
「部落解放」590号 掲載
- ⑥2011年著 「もう、ひとりにさせない わが父の家にはすみか多し」
いのちのことば社